第3種郵便物認可

難民、「福島」避難者 根は同じ

身近な困難 認識を

京のFMで発信 男性が本出版

京都市中京区のコミュニティーFMで難民問題をテーマに番組を続けている男性が、新著「誰もが難民になりうる時代に」を出版した。ラジオでは東日本大震災をきっかけに原発事故の避難者や子どもの安全について発信してきた。著書を通じて「難民も福島の問題も共通している。私たちが身近な困難として受け入れ、ともに次の一手を考えられるかどうかが問われている」と訴える。

福島の子どもたちに思いを寄せ「誰もが難民になりうる時代に」を出版した宗田さん（京都市中京区・京都三条ラジオカフェ）

「子どもらの安全 なくすな」

龍谷大非常勤講師の宗田勝也さん（47）＝高島市。2004年から「京都三条ラジオカフェ」の番組枠を買い取り、難民問題を専門にする「難民ナウ！」を放送している。

震災後、迫害や暴力によって土地を追われる難民と、福島第1原発事故の放射能で故郷を離れた避難者の姿が重なった。著書では、国策として原発建設を進めた国や電力会社と、受け入れざるを得ない自治体や住民との間にある「構造的暴力」にも踏み込んでいる。

11年4月、文科省が子どもの被ばく限度量を年間20ミリシーベルトに緩和すると発表した。宗田さんは難民問題で問い掛けてきた「子どもが自分の家で安心して暮らせる日」が失われるのではないかと危惧した。11年10月、「子どもを守る！」をコンセプトに「難民ナウーTV」を立ち上げ、インターネットによる映像配信で避難者の声を紹介。その経緯も記した。

著書には元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんが「世界は身近な取り組みから替えることができる」とメッセージを寄せた。宗田さんは「社会を覆う『このままでも仕方がない』というムードを変えるのは難しい。でも放射能に不安を感じる家族や子どものために考えるきっかけになれば」と話している。

189ページ。現代企画室刊。1050円（税込み）。本の売り上げは全額、難民の自助グループと原発事故の避難者グループに寄付する。（後藤創平）